

愛しき野良猫

野良猫サバ

8年前の晩秋の夕方、庭に4匹の猫の親子を見つけた。

黒い親猫が生まれたばかりの三匹の子猫を連れて来たのである。

娘は自分が連れて来たと言った。

親猫の鋭い根は私に向けられていて、「あんた、この子たちをどうして呉れるのさ」と「交尾の後消えてしまった父親が人間の私だ」と責任を取らせる決意のようにもみえた。

危なく動揺するところだった。「あわてるな！相手は野良猫じゃないか！」…。ひと呼吸後、「第一、俺はあの頃は旅行に行っていたんだ！」と最強の弁明を思い付いた。

それが、短いような、十分に長かったような時間の彼らとの巡り会いの初日であった。

「この家では、二匹がせいぜい」と考えたか、親猫は一番ちっちゃい子猫を連れて姿を消した。

なーんだ、あいつが一番可愛かったのに…

さて、最近、自分の生涯が、のめり込む事を探し回っている旅だけに終わってはならないと自省し、周囲へ与える混

乱を避けようと決意したばかりであった。

しかし、猫たちを見てブツンとなった私は、早速、ダンボールで家を作り始めた。商売柄、ダンボールには事欠かず、ガム・テープ補強し、いろんな形の家を造った。

でも、彼らは我が家と認識しない。懲りずに増改築を繰り返した。

研究の結果、出入り口は、大きくなければならないし、上部が開いていなければならぬことに気づいた。

我々と違って、野良猫は逃げ口のない所には入らないのだ。

緑色の人工芝と犬小屋が彼らには最上の組み合わせである。

遂に、彼らが入っているのを発見したのは、強い雨の夜だった。

その日から、彼らは我が家の猫となった。

2匹の猫は仲良く一日中じゃれ合っていた。

小猫ほど幸せそうな動物もいないかも知れない。

働かなくても良いからか？与えるもの奪うものが無いからか！

定年後の我々の姿か。それとも、生きることとはじゃれ合うことと見抜いたのか？この二匹の仲の良さには涙が止まらない。

その夏は暑かった。昼過ぎ。コンクリート敷地に水道を流す。

猫たちは流れ出した水を追う。丸く進んで行く流れの先端を追う。首を傾げ、伸ばした手で水を掴む。冷たさに驚き、飛びのき、首を傾げる。考える。

「これはなんだ」変だ。先端で待ち伏せをする。目を近づける。また手を怖々と伸ばす。

秋が深くなり、外の気温が下がる。デブの私から見るとヤセは寒そうだ。心配になって深夜覗き込むのが日課となった。

とうとう、多少の反対意見もあったが、家に入れた。今までになかった好物の餌で騙して家に入れる。そっと背後に廻り込んでドアを閉めた。

「さあ、外敵も悪天候も怖くないぞ」と愛人を囲ったときにの(純粋な心の)猫撫で声で囁く。

しかし、庭ではあんなに元気でのびのびとしているのに、家の中では脅え続ける。手の届かない高所に駆け上がり震え、悲しそうに泣き続ける。

外に出ようとしてガラス戸に何度もぶつかって行く。

こんなに、大事に考えているのに俺と暮らすのが嫌なのか。夜になれば、顔を出さない日はなかったのに。

そうか、彼女たちはお手当の日と立ち寄りの時、以外は外に出かけるのか。別なヒトとも会うことができるのだ。

お前たちは閉所恐怖症になってしまっているのか。もうすでに戸外の猫になってしまっているのか！

なんという強烈な遺伝子の支配だ。外に戻した。秋は本格化し、寒そうだ。

中国製の電気アンカで失敗し、(中国人を良く知る患者さんは否定)ホカロンをタオルにくるんで箱に入れる。少し大きくなって来た途端、毎晩欠かさ

ずに、夜回りに出かける。

朝、大きな傷を作り帰って来る。

毎晩バイクで出掛けるどら息子、徒党を組んで観客の入場券売上を握りしめて六本木会員クラブにでかけるのと同じか。

心配していたように 春、弟のほうに突如不審死をした。

その後、残った猫はサバと名付けられ、わが家の一員となった。

室内犬が側を通っても室外猫は相手にせず、長々と寝そべっている。

夕方、わたしが、角を曲がって口笛を吹くと出迎いの行事を始める。

まず、おもむろに、前足を揃えて伸びをし、目を細めて、あくびをする。そして、左足を一步出し、次に右足を一步出す。そして、首を回す。

俺を深く愛して何時間も待ち続けた事を悟られないように、もう一度、ゆっくり時間をかけて、目を細めて、あくびをする。愛しき猫サバだった。姿が見えない時は、昼は空に向かって、夜は闇に向かって猫を呼ぶ。「ネーコー、サバー」と呼ぶとどこからともなく姿を現す。ある時は隣家の高い塀を乗り越えて、一直線に駆けつける。

「ニャーオ」と呼ぶと「ニャーオ」と返答する。

深夜、突然呼び付け、背中を撫でる私を嫌がりもせず、ゴロゴロと喉を鳴らして形振りかまわない喜びの郷に入る。サバと付き合い始め「猫はね・・・」と知ったか振りしを始めた。なにせ、印刷していない紙を見つける事が難しい現代、読む人より書く人のほうが多い現代でも、野良猫の飼育法の本は少ない。その日、その日が新しい知識であった。



日を増して深まるサバとの付き合いは、いつまでも続くとさえ錯覚した。でも 二回目の初秋のある日、サバは三日間も、姿を消した。悪い胸騒ぎで不安を募らせていた我々の前に、痩せ衰えた姿で現れた。瀕死の姿で帰って来た。すでに下顎呼吸をしていた。そして二十分後に死んだ。どんなに苦しい最後の旅だったすぐ分かった。微かに残っていた命を捨てる旅



だった。みんなの顔を見に、腕に抱かれに、別れを告げに、我が家で死ぬために帰って来たのである。

犬ならばそうはしないし、いわんや人間では思いつきもしないだろう。お前も、あの弟猫と同じに、不審な死に方をした。野良猫なるがゆえの命の終わり方だった。お前は現れ方も生き方も野良猫の遺伝子に従ったが、わが家の一員として暮らした。だから、わが家で死にたかったのである。サバは、私たちの猫として一生を終えた。野良猫 おいでー街の野良猫は、四面楚歌である。飼い主の死亡や転居で発生する捨て猫に命を狙われる。小さく可愛い猫が捨てられるはずはな



く、捨てられるのは巨大な猫である。人には甘え取り入れようとするが野良猫には敵意を見せて命を狙う。

このよう「捨てられ猫対野良猫」「強い野良猫対弱い野良猫」の抗争に加えて、「猫嫌いの人間が企てる悪徳」「体に抱える無数の病原菌」「潜り込む余地の無いコンクリート性の家屋」「動物を排斥する取り決め」という環境の中では、どの野良猫も数年の命である。

不幸な小猫をつくらないためには去勢手術を、という問題が起こった。しかし、野良猫を捕獲することは至難の業である。そして、去勢されて中性になった野良猫は縄張りの中の位地を失い仲間はずれにされるとも聞く。メスであるから存在できるのである。多くの病気を持って生まれた野良猫は母親になる前に死んでしまうだろう。数十日間の命を、喜び生きたとすれば、それも一つの生命の形かもしれない。家の中を拒否するからには野良猫の宿命であろう。

人生の七十年が長く、小猫の六十日間が短すぎるとは言えない。野良猫をあわれと思うよりも、そうした短い出会いで燃焼し尽くすべきなのだ。

猫は見るのも嫌だという人がいる。私もサバに出会う前には、野良猫に強い偏見を持っていた。

兄夫婦は特に兄は、帰り道小猫の泣き声を聞くと、与えられた使命感で全身が至福に満たされるタイプで、死ぬ寸前の捨て猫を何匹も飼っていた。会うたびに、そうした猫にはこれこれという黴菌が居るからと、医学知識を持って非難をしていた。まったく耳を貸さない夫婦に悲しささえ覚えていた。



それが、このメロメロ状態である。人生は誠に不可識である。人には厳しく、自分には甘いに過ぎないとも言える。

しばらくして家の方に小猫が二組来るようになった。「顔に黒い毛があることを除けばサバに生き写し」のサブも愛しい。大きな野良猫と大きな捨てられ猫も来る。

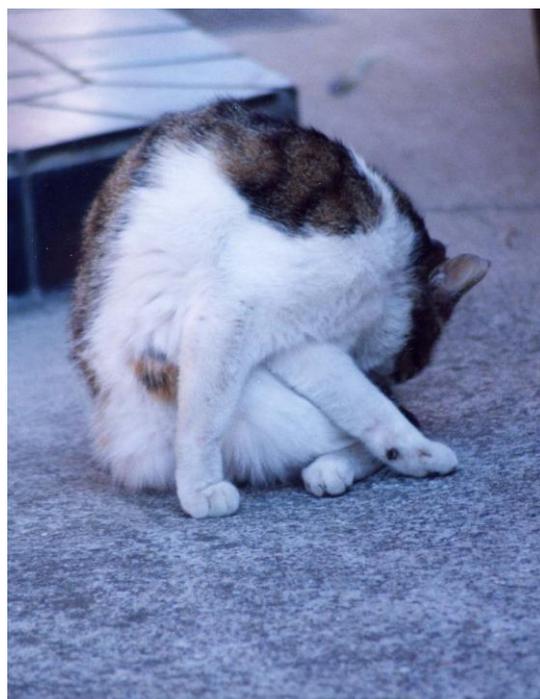
愛しい野良猫よ、数百日の命のお前たちは母親に甘えることも短い。怯えながら物陰から物陰に潜み続ける。一瞬の油断が命を奪う。傷ついた耳は大きく立てられ微かな敵の足音を拾う。与えられるもの見つけたもので我慢する。餌を無理に求める事は死に結びつく。だから空腹のまま眠ることを覚える。しかし何よりも不憫なのは甘えることを知らないことだ。母親に甘えたのは数十日に過ぎない。毎夜、決まった時刻、お前たちは車の下に身を潜めて餌をじーっと待っている。

闇の中に大きく開かれた瞳が、私を見つめ続ける。私の誘う声に激しく心が揺れている。

「おいで、ニャーオー、おいで」。顔、ヒゲそして耳が揺れる。時に「ニャーオ」と返事をする。優しい声に心が動くのが手に取るように分かる。しかし、手による愛撫を寸前で本能が拒絶する。置かれた餌を無言で食べ続ける。強烈な遺伝子に再び支配される。お前が生涯を通して心と身体を許すのは母親の声だけなのだ。でも、もうそのお母さんはいない。「私がお母さんだよ」と話し掛けても遠くを見詰めるだけだ。距離を置く悲しさ、哀れさ。生涯、喉を愛撫されてゴロゴロと鳴くこともない。

空腹を抱えた野良猫は餌カンをカラカラとを鳴らすと飛んで来るようになった。そういう時には機嫌も良く「ニャオ、ニャオ」というと、その度に返事をする。玉子焼きなど好物だとフガフガと鼻を鳴らして食べるのであるが、おいしいおいしいと礼を言うつもりであろう

が、ニャオ、ニャオと言いながら食べるので、フギャフギャという声になる。慌てて、頬張る姿に七歳頃、の強烈な思い出が脳裏に蘇った。満腹になり舌舐めずりしているうちに、うとうとし始める。でも常に回りを見渡し続ける。それでも私が見守っていると、猫はようやく目を閉じる。やっつと、短い々々まどろみに入る。そう ゆっくり、お休みなさい。



パレー家

診療所の裏にも一匹のやせ衰えた小猫が現れ始めた。「あそこの家は甘ちゃんも良いところ」と猫新聞に記事でも出たのだろうか？ 私はがぜん忙しくなった。毛の組み合わせがぐちゃぐちゃで、「下手な画家のパレット」のようなのでパレと名付けた。識者に言わせると「ぞうきん猫」と言うそうだ。なんと可哀相な言い方か。ところが、この小猫のお腹がどんどん大きくなってきた。あっ、妊娠だ！ ついに、座ると横に広がる腹になった。

母の日だけど、俺は白いカーネーションと言っていたら、お腹のぺっちゃんこのパレが現れた。どこかで、子猫が子猫を生んだのである。

数日後、五匹の小猫を運び込んだ。灰色と白が一匹、茶色と白の組み合わせが三匹、一匹は茶色という三種類である。人間では、子供から母親を引くと実の、真実の父親が浮かぶそうだが、パレの場合はぐちゃぐちゃない色を分解しただけに見えた。オスの仕事は小道具を持ち込んで釘を打つだけと言われるが、やはり、父親は現れなかった。

さて、猫の社会には厳格な縄張りがある事は周知のことである。少しでも食べ物が出される場所は、野良猫に取っては命懸けで守らなければならない。猫たちが夜に出て行くのは縄張りを巡視するためである。しかるべき空き地を集会場所と定め、話し合い、談合をしているそうである。猫同士の見境ない喧嘩をする事を避けるために、出っくわしても、うなり合うだけにする。どちらかが逃げ出す

ので本格的な喧嘩にならない。目と目が合った時は命懸けの抗争となる。どっかの世界と同じである。

こういう意味で、父親が後ろ盾となっていない「パレー家」は、その場所で生活してきた猫たちのテリトリーを荒らしていることになる。そのために、排除しようとする側の攻撃が一家を襲う。

母親野良猫の頑張りが始まった。隠れ家が、少しでも、危険と思うと、即時、移動する。診療所でも、五匹の赤ん坊猫を見て、我々が興奮したので、その夜逐電してしまった。

一匹ずつ、くわえて転居する。大人の身の丈の扉もくわえたまま飛びあがる。数百メートルも遠くに移動する。数カ月前まで、親猫に首を掴まれて移動していた小猫が、今は五匹の子猫の首をくわえて移動させている。目的地で啞えた小猫を離れたら冷たくなっていたなんて事は無いのだろうか？ 完璧な手術の直後のオペ室で稀に見られる「脈が有りません！」大騒ぎなどは無いのだろうか？

危険を察知すれば、即座に移動する。道路を隔てた空き地、次に巨大ビルの下、次は結婚式場所の下水配管の中へと。銅像を建てる目的の一つは鳩のためと言われるが、放置されて草茫々という国有地は野良猫のためにあるのかも知れない。その後はパレだけがエサを食べに来る。後を付けて行き、一匹少ない四匹の生存を発見した。しかも、そのうちの一匹は元気がない。心中で哀悼。しかし、三日後にパレが再び小猫たちを連れてきた。なんと五匹ともすべて健在。てっきり二匹は駄目だと思っていた。なんと

いう生命力だ。パレ、おまえは母親猫の中の母親猫だ。見上げたものだ。

あまりに嬉しくて牛乳を買ってきて、「猫、ネーヨー」と呼びながら、近づく。小猫はみんな隠れたのに、お前は、あの痩せた体を私の前に割り込んで、ウーと唸る。体を張って小猫を守るというわけだ。やるね！やったね！

当然、この6匹の親子に、弱肉強食という生存競争が始まる。

こんなに、親の言うことを聞く子供たちはいない。特に我々の身の回りには…子猫の子猫も、自分たちにだけ向けられた母親の声だけに反応する。つまり、生まれた時に、見た顔、聞いた声だけを信用するのである。親子が連絡を取り合っているのを聞くと、「ニャーオ」は「ニャオー」だが、裏声である。サバたちも、この時期に私たちに託されたので、私の「猫撫で声」を母親の声と信じたのである。

しかし、非情なことに、この弱い母親がいるからこそ、この猫達は短命なのだ。母親の声だけを信じさせて人間を信用させない教育をしている。生まれたての小猫の時に人間の声を聞けば、人に馴れて、家猫になることができる。少し過ぎた小猫は死ぬまで、完全な野良猫になってしまう。

彼らとの短い触れ合いを求めて、深夜、車の中から、無邪気に遊びまわる六匹の猫の一家に見とれていた。

目の前には、昼間我々の前では、空腹を訴えてニャア、ニャアと泣くあの小猫が、中心に居る。痩せて小さく毛並みも悪いのはそのままである。しかし、小猫達の保護者として、軽く目をつむり、どっし

りと座っている姿は母親としての威厳すら感じさせる。小猫達が戯れるありさまほど天国を彷彿させるものはない。いつまでも、いつまでも駆け、飛び上がり飛びつき転がる。母親の尻尾にいつまでも纏いつく。眠くなって、互いの四肢を枕にしあって、一塊りになって眠り始める。その実、自分の顔が向いている方向の警備を担当している。

しかし、私のこの幸せな興奮も長くは続かなかった。その夜、巨大な猫がやって来て親子6匹は必死の逃亡生活再開。翌朝、柿の枝が折れていて逃げ回った形跡があった。一家の無事を皆で祈った。昼過ぎ、親猫だけが、ご飯を食べに来た。食べ終わって、あくびをして用心深く帰って行った。

当然ろ、患者さんに待って貰って、猫カンを持って、後を付けた。猫だって後を付けられないように、広い道路を横切り、車の下で休む。しかし、ちょっと離れていると、歩き出す所が猫の浅はかさか？ いやいや、ひよつとしたら、逆に私を誘導しているのかもしれない。とすれば、大した役者だ。ともあれ、マンションの駐車所に着いた。裏声一声、小猫たちが集まる。数えて5匹を確認した時は思わず落涙。靴べらでフェンス越しに、ネコエサを落とす。「ニャオー」と言っていると、パレは「後付けたのね！」とちょっと睨む。その晩も届けた。チビたちも少し、顔を覚えてくれた。

しかし、雨が何日も続いた。猫がいない。ご飯はどうしているのだろうか。考えると眠れなくなる。ある日、診療所の裏に3回目の転居となっていた。歓迎パレ御

一家様。

深夜、そっと覗きに行くと、親のパレは樹の下で寝ていた。小猫は木の上にあった。つまり、パレは敵が来たら、自分が囷になって、逃げ出して小猫たちを救う計画なのだ。なんと利口な！「お前たちは木の股の所で眠れ」というのはなんて言うのだろうか？誠に興味が湧く。小猫たちは日毎に大きくなって行った。

生涯教育を放り出して、この一家を観察していると、人間と同じである。小学校のクラスには、気の弱いというか、ぐずというか、用心深いというか、そういう子供が2人位いるものだが、小猫の5匹のうち2匹は、それにそっくりである。

餌を与えても、親が良し!と言うと真っ先に食べるもの決まっているし、四方を何回も何回も見て最後に来るのも決まっている。

転居のために広い道路を6匹が横断するのは壮観である。親猫が安全を確認し行くぞと走り出す。2匹は続く。

しかし、3匹目は、改めて自分自身で判断をしなければならぬ。さらに、気の弱いというか、用心深い後の2匹が、遂には渡り損ねてしまう事も良くあることである。

小猫に取って車の往来激しい6m道路がどんなに危険なものかを人間は理解しているのだろうか？

しかし、本隊から取り残された小猫は、決して慌てない。安全な車の下に潜み身を縮め、じっと深夜を待つ。深夜になれば、母親猫の声が聞こえるし、道路も安全となる。猫の利口さは並みではないのである。

しかしながら、彼らと付き合い始めて、道路に茶色の布切れ端が丸まって落ちていようものなら、飛びあがってしまう日々が続いている。もう少しすれば、一人前の野良猫になり、単独行動するであろう。でも、すぐ妊娠してしまうのかしら？

「ね、ね、子猫が訊ねた。いつも、私たちを追いかけ回しているおじさんは誰？猫撫で声で、呼んでご飯を持って来るあの人、お母さんの何？私たちのお父さんなの？」

「私の訳アリよ」と少し頬を赤らめて、母親猫は言った。

それにしても、私は何匹の猫に食事を用意しているのだろうか

家のほうの庭には、どんなに多く置いても、翌朝には無くなっている。

途中でスズメで、朝はカラスだろう。仕事場の方でも外に出れば、「ネコー、ネコー。ニャーオ」というし、家でも、帰れば「ニャーオ、ニャーオ」である。

他所から見れば確におかしい。

オハヨウ、カエッテキタヨ、オイデ、そしてジャアナーとか、家ではあまり使用されなくなった単語が連発される。

何という幸せ。

しかし、中年男のこの思い入れはやはり異常か。なぜならば、靴べらと猫カンを持ってうろつくと、様々な世間の常識にぶつかってしまう。

塀を越えた時発見され、長々と叱責された。泥棒を未然に捕えたと考えたのか？

「あなた、そこでなにしているの？」と誰何された時、「猫を探していました」

と答えたけれど、信用してくれなかったのだろうな。

多分下着泥棒と確信したのだろうな。

「そういうことは犯罪でしょう。監視カメラには顔がしっかりと、映りましたからね」と何回も言われた。

「あそこの医者ですが・・・」と言った時は流石相手も少し絶句したが「お医者さんでも良いわけ無いでしょう」と言われた。開放されて、マンションのガラスに映る自分を改めて眺めた。やっぱり、下着ドロと間違えられたのだろう。また、近くのコンビニでも、日に二回エサを買いに来ると苦笑された。だから、箸を2膳貰って、「これ好きなんだ」と誤魔化している。

そもそも、我々の商売を始めとして、この世の中、常識を超えたことだらけだ。とは言え、考えて見れば、家に保護を求めて来る時だけ、興奮すればいいのだ。探しに行って、そこでエサをやろうとするから無理が生まれるのだ。

「ネコ、ネコー」と低い声を出しながら、靴べらでエサを見知らぬ家の庭に放り込むのはやはり、おかしいか？

第一、そこの家の人踏んだら「ウンチ」と思って跳びあがるだろうな。とは言うものの暫くは近所を徘徊するであろう。常識にブツカリながら。

パレー家との付き合いは5ヶ月を越えた。5匹ともしっかりとした小猫となって来た。そして、ある日を境に親猫パレは姿を見せなくなった。5匹の小猫が診療所を我が家と認識し、造られた猫小屋を中心に生活しはじめた。緑色の人工芝が大好きだということも解った。ダンボールにそれを敷くと入り込む。やっとな

最近、少し触らせてくれる。

しかし、野良猫は、呼べば来るなんていう甘いものではない。エサの切れ目が縁の切れ目、とも痛感する。

追い込んで、押し付けた状態でしか、身体を撫でさせないところなどは、上品な女性に似ているか？

「ね、何もしないから」などという猫撫で声とかが必要なのは男と女の付き合いと同じであろう。

「いいかい、初めての時は、まず、拒絶するんだよ」と野良猫の母親も教えているのであろう。「よいかい、お前たち…愛着、従順、冷淡、放漫、薄情の強弱を繰り返すのよ。これは昔から猫族の知恵なんだからね」とも言っているのであろう。

昔から「猫は人間と対等に生きる」と言われる由縁か。

小猫が気まぐれである事をしめす小話がある。【よく有る穏やかな家庭の夜である。暖炉の火はゆらぎ、妻は編み物にいそしみ、夫はコニャクを片手に夕刊に読みふける。「ねえ、あなた。猫って、嘘つきで、偽善者で、不実で、泥棒で、それに、とっても残忍なんですって」・・・「そうだよ、小猫ちゃん」】

これ以上の接近は無理かもしれない。仕事場の人々の顔も認識し始めた。考えてみれば、食物連鎖の下の方を守ってやろうとする事に無理があるともいえる。

パレが、狩猟の教育として捕まえて来る親ネズミにしても、可愛い子ネズミがいるであろう。「子ネズミはどうする」など未解決な問題は多い。

ともあれ、暫くは、幸せ半分心配半分

の日々が続くであろう。

近藤家と子猫一家

なぜ、自分がこんなのにのめり込んだのか、我ながら不思議に思っていたが、診療所の裏で、少ないエサを頭をぶっつけ合いながら食べ、満腹後には、天使のように遊ぶ姿を見ているうちに、「そうか!」と思いついた。異常に思える私の行動の原点に思いついたのである。近藤家が転居を繰り返していた頃の姿を彼らに見ていたのである。

私たちは十回引越しをした。父母は終に自分の家を持つ事はなかった。

我々6人兄弟の内5人は満州で生まれた。私のすぐ下の妹は誠に早死にをした。父母たちは、あの子が一番きれいだったよ、と証拠の無い話を何回もした。昭和21年、敗戦による引き揚げ作戦が開始された。一番下の弟は母が45歳のとき生まれた。この頑張りには確固とした理由がアッタノダロウカ?結果か?

ともあれ、敗戦決定的になった頃より、ロシアの参戦と満州への侵略と横暴は我々一家をはじめとした全ての人々に不幸をもたらした。

九州大学を卒業し、満州電機で技師生活をして居た父は、それまでは誠に幸せな生活を送っていた。大好きな酒もふんだんに飲めた。鼻を赤くしてしまうほど続けた酒であったが、敗戦後生活に追われ辛い思いを続けることとなった。

とは、言え、あのまま、満州で酒浸りになっていたら、40歳位で落命していたであろうし、我々の人生航路も全く違うものになったであろう。

この異国における敗戦国民としての生活とその後の引き揚げるまでの行程

は危険だらけで、文字通り必死の逃避行であった。私は落ち着いたら、その辺を近藤家の歴史として聞いて置きたいと思っただけで、ついに聞かないままに終わった。

満州孤児一時帰国の番組に、大変真剣になっているのを見ると、「もう一人くらい居たのかな?」などと思った。

父が持てるだけの財産を全身に抱え、母は前に妹、背中に(恥ずかしながら)3才の私を背負い、両手に兄と姉の手を握り、四国の父の実家に転がり込んだ。こうして一家の流転の第一回目が始まった。

その4回目の引越しで、父母と5人の子供が、慌ただしく故郷を離れたのは昭和26年であった。数日後、父は新しい職場である札幌に単身赴任して行った。母と子供たちは、三つ駅向こうの村に身を寄せることになった。子供たちには天国と見えた故郷を離れる理由は知る由もなかった。

はじめの数ヶ月は、6畳と8畳の部屋にいて、その後の8ヶ月は別の家の「ゴザを敷いた納屋」に移った。日ごとに月ごとに家具は減少し、住いは広がって行った。

【質草の言葉多きは品足らず】

雄弁な母の顔が浮かんでくる。質屋の息子が「毎度ありー」というような顔でにたーと笑ったように感じた。

しかし、やはり狭かった。引揚げてより、ずーっと連続した間借り生活であったから、十畳あれば広いとさえ感じていた。札幌でも間借りであった。

だから、広い家に対する願望は、すべ

ての兄弟の骨身に染み込んでいた。特に公団のトイレは狭く、使用の度に頭をぶっつけたので、遺伝子の一部さえも変化したのであろう。

45年間「引越しの多い一家近藤家」としか思っていなかったが、小猫一家が逃げ回るのを見て「ひっとしたら、我々も何かから逃げ回っていたのではないか!」と思い始めた。

NHKを始めとするあらゆる集金に恐れ慄いていたことも知っていた。夕暮れ時の「鐘が鳴る丘」とか「新諸国物語」などがなければ我々は暗い夕方を送ったであろう。幼い5人兄弟たちは丸まって暗い中で想像の世界に精神を開放していたのである。

あの子猫たちが、頭をぶっつけながら、夕飯を食べ、折り重なって暖を取っているのを見た時に、忘れていた近藤一家の原点を突如思い出したのである。彼らを見ていると、私の常識のタガはプツンと切れるのである。

母は次々に現れる辛いこと悲しいことを腹に飲み込み、暴れまわる五人の子供たちの中心に悠然と座っていた。母に取っては、今、パレがしているように、5人の子供たちの現在を切り抜けて行く事だけが全てであったのだ。

思春期を迎えた兄は、匹敵する能弁者は、県下には居ないと言われた立場から、新しい村では無名の子供に過ぎなくなった。祭の劇では白雪姫を森に連れて行き殺す事を命じられた獵師役を指名され、見事に舞台上で落涙してみせた。しかし、田舎の女子が扮する後の前で流した涙は彼自身の境遇に対する熱い涙だったかもしれない。プツンとなり始めた彼は

学校と映画館に半々に行っているようだった。

このままだと入場料に困って、間違っただ道へ歩み始める事は時間の問題だった。母は、先人が軽い気持ちで使用し続けてきた「出世払い」という空手形を映画館の受付の人に乱発した。その後も、何十回かは出された手形は回収されているのだろうか?

私は40を超えた時、札幌の米屋さんとお医者さんに、手形を回収しに行ったが、帰ってきたのは、当惑の笑顔だけであった。だから、医者である私は、いつも「この当惑した笑顔」を用意してある。そのようにこの頃はかなり、どん底の生活を送っていたようだ。

後の4人はきちんと、学校に行った。なぜなら、学校給食で昼ご飯を確実に食べることができたからである。夕方五時になって新居浜から流れて来る「新世界の第2楽章家路」が、その日の苦勞終了の合図であった。我々兄弟は、この曲を聞くとこの辛かった日々を思い出す。現在の控え目な私の性格はこの頃に形成されたとも言える。それまでの小学校では、上下1学年ずつを入れても無敵であった。だから一年生の写真こそ乞食の子供のように写っているが、二年生からはいつも真ん中にいた。今でも惚れ惚れするような威厳を感じさせる。それが、新居浜からは前列の左端っこにちょこんと位置させられるようになった。それ以後、何時の間にか、端に並ぶ癖が付いてしまった。

ほどなく、札幌で一家は揃った。そうして、貧しい（もっとも現金がなかっただけであったが）近藤家の都会での新たな闘いが始まったのである。

